家持の「感旧之意」

――池主に贈るほととぎすの歌――

西一夫

一

天平勝宝二（七五〇）年といえば、当時越中守であった大伴家持のほととぎすを主題とする詠作が萬葉集中に最も多く残る年にあたる。この年、家持は三月二十日の「詠二霍公鳥幷時花一一首幷短歌」（巻十九・四一六六～四一六八）を始めとして、四月二十二日の「廿二日、贈二判官久米朝臣広縄一霍公鳥怨恨歌一首幷短歌」（四二〇七、四二〇八）に至る約一箇月ほどの期間に、のべ二十一首のほととぎす詠を作った。これらのほととぎす詠のうち、「詠二霍公鳥幷時花一一首」は、左注に「右、廿日、雖レ未レ及レ時、依レ興預作之」と記されていることから、実際に鳴き声を聞いての詠作ではない。また三日後の「廿四日、応二立夏四月節一也。因レ此廿三日之暮、忽思二霍公鳥暁喧声一作歌二首」（四一七一、四一七二）も題詞の内容からみて同然であろう。この立夏を翌日に控えての詠作以降、家持は矢継ぎばやにほととぎすを詠んだと思われ、集中には三群のほととぎす詠が連続してならぶ。

詠二霍公鳥一二首　（四一七五、四一七六）

四月三日、贈二越前判官大伴宿禰池主一霍公鳥歌。不レ勝二感旧之意一述レ懐一首幷短歌　（四一七七～四一七九）

不レ飽下感二霍公鳥一之情上述レ懐作歌一首幷短歌　（四一八〇～四一八三）

いずれも鳴くほととぎすを詠んでおり、家持はすでにほととぎすの声を聞いたかのごとく以後の詠作へ展開してゆく。ところが、「更怨二霍公鳥哢晩一歌三首」の第三首、

月立ちし日より招きつつうち偲ひ待てど来鳴かぬほととぎすかも　（四一九六）

によって明らかにされるように、この時点に至るまで、家持はほととぎすの声を実際に聞いてはいないのである。つまり、立夏以降の鳴くほととぎすを詠んだ作品は、家持の想像によって詠まれたのであって、それだけにほととぎすが鳴くことに対する期待がつのっていた時期であったといえる。

殊に四月に入ってからの詠作では、「不レ飽下感二霍公鳥一之情上述レ懐」（四一八〇）の題詞に端的にあらわれているように、家持のほととぎすに対する執着の強さが看て取れる。かくのごとくほととぎすへの思いが高まっていたなかで、家持は「霍公鳥歌」と題する長歌を池主に贈った。

四月三日、贈二越前判官大伴宿禰池主一霍公鳥歌。不レ勝二感旧之意一述レ懐一首幷短歌

我が背子と　手携はりて　明け来れば　出で立ち向かひ　夕されば　振り放け見つつ　思ひ延べ　見和ぎし山に　八つ峰には　霞たなびき　谷辺には　椿花咲き　うら悲し　春し過ぐれば　ほととぎす　いやしき鳴きぬ　ひとりのみ　聞けばさぶしも　君と我れと　隔てて恋ふる　礪波山　飛び越え行きて　明け立たば　松のさ枝に　夕さらば　月に向かひて　あやめぐさ　玉貫くまでに　鳴きとよめ　安寐寝しめず　君を悩ませ　（四一七七）

ひとりのみ聞けばさぶしもほととぎす丹生の山辺にい行き鳴かにも　（四一七八）

ほととぎす夜鳴きをしつつ我が背子を安寐な寝しめゆめ心あれ　（四一七九）

長歌の作られた天平勝宝二年は、ふたりが越中で集中的な贈答・唱和をおこなった天平十九（七四七）年からすでに三年を閲していた。池主はこの間に越前掾に転任していたものの、ふたりは折にふれて歌の贈答をおこなっていたと覚しく、この贈歌に先立つものとしては、二度の贈答[1]が確認できる。

越前国掾大伴宿禰池主来贈歌三首　（巻十八・四〇七三～四〇七五）

越中国守大伴家持報贈歌四首　（四〇七六～四〇七九）

越前国掾大伴宿禰池主来贈戯歌四首　（巻十八・四一二八～四一三一）

右歌之返報歌者、脱漏不レ得二探求一也

（更来贈歌二首　（四一三二、四一三三）

いずれもが天平二十一（天平感宝元・天平勝宝元（七四九））年の作品で、前者は三月、後者は十一月から十二月にかけての贈答であった。

また、天平勝宝二年には、当面の長歌の直後にも池主に「水鳥」を贈る際に詠み添えた「贈二水鳥越前判官大伴宿禰池主一歌一首」（四一八九～四一九一）がみえ、この時期に池主を思う家持の心情が、作歌活動に反映していたと案ぜられる。しかもかくのごとき家持の思いは、当面歌の題詞からも窺える。題詞は、「四月三日、贈二越前判官大伴宿禰池主一霍公鳥歌」をもって、その機能を十分に果たしているといえる。ところが家持は、「不レ勝二感旧之意一述レ懐」と書き継ぎ、詠作事情の一端を明らかにしようとしていたと察せられる。この時分、家持の心中に沸き起った「感旧之意」については、題詞に「贈二越前判官大伴宿禰池主一」と対象が示されていることから、その意味する具体的内容もおのずと明らかになってくる。すなわち、ふたりの作歌活動が最も充実していた天平十九年の春から夏にかけての集中的な贈答・唱和を意味していると理解できる。

「感旧之意」を池主とのかつての交流を意味する表現と把捉するにしても、題詞に「不レ勝二感旧之意一」と記された一節は、萬葉集中ここのみにとどまることから、なお検討の餘地があるといえよう。「感旧」は、

今鑾駕旋軫、東京榛蕪。義士有二存レ本之思一、兆人懐二感レ旧之哀一。　（『後漢書』巻七十、荀彧伝）

などとみえる語である。また、題詞として「不レ勝二感旧之意一」

は破格と思われる部分ではあるのだが、「感旧」が詩賦題としても用いられていることは注意すべきである。はやくは晉曹攄に「感旧詩」（『文選』巻二十九）とみえ、さらに『文選』（巻十四、宋顔延之「赭白馬賦」）の李善注によって、曹攄には「感旧賦」も存したことが知られる。「感旧賦」は「胡馬仰二朔雲一、越鳥巣二南樹一」のみが残り、その全貌は明らかにし難い。だが、「胡馬」「越鳥」の対句が『文選』（巻二十九）の「古詩十九首」（其一）にみえる「胡馬悲二北風一、越鳥巣二南枝一」をふまえることは論を俟たない。「古詩十九首」（其一）の二句は、離れた故郷を懐かしむ心情を表現した部分であり、「感旧賦」の逸文もおそらくは同様な状況を詠んだ内容であったと案ぜられる。そういえば、当面の贈歌に先立つ天平勝宝元（七四九）年十二月、池主の「更来贈歌二首」（巻十八・四一三二、四一三三）に添えられていた書簡のなかでも「身異二胡馬一、心悲二北風一」のごとく、「古詩十九首」（其一）の「胡馬」「越鳥」をふまえた表現が存したことを見逃すわけにはゆくまい。この詩句を用いることによって、池主はかつての交流を懐かしむ思いから、家持を思慕する心情を表現しようとしていたと考えられる。

かたや「感旧詩」では、「富貴他人合、貧賤親戚離」（第一・第二句）と述べたうえで、「今我唯困蒙、群士所二背馳一。郷人敦二懿義一、済済蔭二光儀一」（第七～第十句）と困苦する「我」を見捨てる「群士」と、なおも礼を尽くす「郷人」とが対比される。「富貴」であった「旧」を思い、「今」の「貧賤」を嘆き、人々の節操のなさを「素絲与二路岐一」（第十四句）と結ぶ。「旧」の意味する内容は、個々の作品で具体化され多義に亘るが、概括的には、過去のことに感じて思いを起こすと把握される。してみると、家持が題詞に用いた「感旧」には、題としての意識が認められ、詩賦題のそれと齟齬するものではあるまい。

もっとも、当面歌の題詞については、『新潮日本古典集成　萬葉集五』が、「四月三日、贈二越前判官大伴宿禰池主一霍公鳥歌」の部分を「以下七首の総題」と解し、「不レ飽下感二霍公鳥一之情上述レ懐作歌一首并短歌」（四一八〇～四一八三）をも池主への贈歌と捉える。同じく、それぞれの題詞以外に総題を附し、歌群としてまとめる手法は、家持の歌作のなかですでに試みられていた。

季春三月九日、擬二出挙之政一行二於旧江村一、道上属二目物花一之詠、并興中所レ作之歌

出挙の公務で旧江村に行く道すがらに詠みついだ長短歌、あわせて七首（巻十九・四一五九～四一六五）をまとめた総題である。「三月九日」は、天平勝宝二年のそれであって、当面歌から先立つこと一箇月ほど前の歌作となる。みずからがまとめた近接する先例をふまえ、いずれもがほととぎすを詠むことから、歌群相互が緊密な関係を有すると解釈し、「霍公鳥歌」までを総題と判断したものと察せられる。また、題詞にあたると解する、

不レ勝二感旧之意一、述レ懐一首并短歌

と、つぎの長歌の題詞、

不レ飽下感二霍公鳥一之情上述レ懐作歌一首并短歌

との関わりも、ここでは考慮されたかもしれない。つまり、ふたつの題詞はいずれもが対象への飽くなき思いを直截的に表現するという共通した手法によって記されたと考えられるからである。ただし、先例となる「季春三月九日」の総題と第一首の

題詞「過二渋谿崎一見二巌上樹一歌一首樹名都萬麻」（四一五九）との書写のあり方には留意すべきであろう。西本願寺本などでは、総題と直後の題詞とは必ず改行されており、各々は明確に区別されていたと看取できる。一方、当面の総題にあたると解する部分と題詞のそれとは連続し、特に意識的な改行は認められない。ならば、このような書写の状態は、ふたつのほととぎす詠が、総題によってまとめられた歌群ではなかったことを意味しているのではあるまいか。従って、「四月三日、贈二越前判官大伴宿禰池主一霍公鳥歌」を総題とはみず、題詞の一部と解釈するのが穏当であろう。なお、題詞相互の関連については、対象への思いを直截的に表現する手法が家持の意に適うものであり、それを隣接するほととぎす詠に及ぼした点にあると解される。

題詞に「霍公鳥歌」と記したところからは、あくまでほととぎすを主題とする歌作であることを示そうとした家持の意識が窺える。一方でこの長歌が池主への贈歌として構想されたことから、家持は天平十九年のふたりの贈答・唱和を回顧して、特に「不レ勝二感旧之意一述レ懐」と書き記したのであろう。それらがともに題詞に明記された当面歌に、家持はいかなる心情を詠み込んでいるのか。以下、表現に即して考えてゆきたい。

二

長歌は、まずその構成をうち見るに、池主が越中掾であった時分、ともに行楽したことを詠む前半部と、越前掾に転任した池主のもとへほととぎすを行かしめ、安眠させないよう命ずる後半部とからなると看取できる。前半部は、春の情景を中心にうたいつつ、「うら悲し春し過ぐれば」と季節の推移を述べたうえで、「ほととぎすいやしき鳴きぬ」とほととぎすを提示して一旦終止する。ここに至る叙述については、つとに契沖が、

是マデハ池主ガ越中掾ニテ有シ時、カタミニ隔ナク時ニツケテ遊ビ慰サマレシ事ヲ述ベラルゝナリ

（『萬葉代匠記』精撰本）

と解釈する。つづく「ひとりのみ聞けばさぶしも」では、すでに池主と離れた現在の状況を詠む内容に転換しており、そのうえ「いやしき鳴きぬ」までが、題詞の「感旧之意」にほぼ対応すると考えられることから、ほととぎすを導き出しているこの部分までを、前半部とみるべきであろう。

前半部の冒頭は、「我が背子と手携はりて」と家持が池主と親しく交流していた姿を描き、うたい起こしとする。このようにふたりの親密な関係を表現するために用いた「手携はりて」は、すでに家持の「入レ京漸近、悲情難レ撥述レ懐一首」でつぎのように詠まれていた。

……はしきよし　我が背の君を　朝去らず　逢ひて言問ひ
夕されば　手携はりて　射水川　清き河内に　出で立ちて
我が立ち見れば……

（巻十七・四〇〇六）

正税帳使として、上京を間近に控えた家持が、池主とすごした日々を述懐した部分である。「出で立ちて我が立ち見れば」は、「手携はりて」とあることを斟酌して、「二人で川岸に立って見やると」（『新潮日本古典集成　萬葉集五』）のごとく、池主とともに眺望したと解し得るであろう。また、この長歌では、すでに指摘[2]

があるように、池主の「敬和下遊二覧布勢水海一賦上一首并一絶」（巻十七・三九九三、三九九四）をふまえたと思われる表現が存する。この池主の敬和賦で注意すべきは、「思ふどち　馬打ち群れて　携はり　出で立ち見れば」（三九九三）と国庁の官人と連れ立ち、布勢水海の遊覧に出掛ける叙述のあることである。池主は家持の「もののふの　八十伴の緒の　思ふどち　心遣らむと　馬並めて　うちくちぶりの」（「遊二覧布勢水海一賦一首」巻十七・三九九一）を受け、それをさらに具体化し、丁寧に和している。してみると、家持は「敬和下遊二覧布勢水海一賦上一首」の表現をふたりだけの描写として「夕されば　手携はりて……出で立ちて　我が立ち見れば」（四〇〇六）と用い、さらに当面歌に再び取り込んだ次第となる。加うるに、家持が上京を前にして詠んだ「入レ京漸近、悲情難レ撥述レ懐一首」は、萬葉集中に残るふたりの集中的な贈答・唱和の最後の歌作ともなっている。そこでの表現を家持が用いたことにより、題詞の「不レ勝二感旧之意一述レ懐」と相俟って、かつての交流を池主に思い起こさせるに有効であったといえよう。

長歌の叙述は、ふたりが「手携はりて」眺めた「見和ぎし山」の春の情景へと展開する。この「見和ぎし山」は、ふたりが見て心を慰める山の意味と考えられ、「明け来れば　出で立ち向かひ　夕されば　振り放け見つつ」と、いつも身近に眺め得る山であったと推察されることから、井上通泰が「山は即二上山なり」（『萬葉集新考』）と具体的に解した。また鴻巣盛広は、「八つ峰には　霞たなびき　谷辺には　椿花咲き」とも詠まれている点を考慮して、「府庁の背後に連亘せる二上山つづきの山をいふ」（『萬葉集全釈』）のごとく、対句表現に即した解釈を示している。この「見和ぎし山」を明らかにするに際して、長歌の表現を検討すると同時に、当面の歌作が池主への贈歌である点を忘れてはなるまい。つまり、贈られた池主にとっても、「見和ぎし山」と詠まれたことで、その意味する山はすぐさま理解し得る存在でなければならなかった。ならば、池主の越中掾在任中に家持は「二上山賦」（巻十七・三九八五～三九八七）を詠み、さらに「かき数ふ　二上山に　神さびて　立てるつがの木」（先掲四〇〇七）と池主への贈歌にも二上山を詠み込んでいる状況は重視されてよいのではあるまいか。従って、対句に詠まれた「八つ峰」は、あくまで実景に即した表現と解すればよいのであって、「見和ぎし山」は二上山を指すとみるのが穏当であろう。しかも題詞の「霍公鳥歌」との関わりからも、「見和ぎし山」は二上山を詠んでいると捉えねばならない。なお、畿内の二上山をも想起させる名前とその山容は、都から赴任していたふたりにとって、まさに見て心を慰め得る山であったとも思われる。

家持は、この「見和ぎし山」の情景を、

〔八つ峰には霞たなびき
〔谷辺には椿花咲き

のごとき対句によって表現した。「峰」と「谷」を対句であわせた例は他に見えないようだが、池主が「峰高み谷を深みと」（「敬和二立山賦一一首」巻十七・四〇〇三）と立山の峻峭たる姿を詠んだ表現を家持は参考にして、当面歌の対句を整えたと推察される。ここで「見和ぎし山」の叙述に池主の「敬和二立山賦一一首」の

表現を取り込んだのは、池主にかつての贈答を想起させるためであり、二上山と解することに支障とはならない。

ふたりが眺めた「見和ぎし山」の景物として、家持は「八つ峰」にたなびく「かすみ」と「谷辺」に咲く「椿」を対句に詠んでいる。いずれもが「見和ぎし山」の春の景物を代表するものであることは、これらがふたりの贈答・唱和にはみえないものの、池主にも十分把握されていたと思われる。対句に詠み込まれた「かすみ」と「椿」の取りあわせは、「峰」「谷」の対句と同様に先蹤とすべき例が存しない。だがそれぞれは、近接するみずからの歌作のなかで、すでに取りあげられてきていた。

あしひきの八つ峰の雉鳴き響よむ朝明の霞見れば悲しも
（巻十九・四一四九）

奥山の八つ峰の椿つばらかに今日は暮らさねますらをの伴
（巻十九・四一五二）

そうした春の景物を対句として整えるにあたり、あるいは、近景と遠景の対句の例ではあるが、

時菊耀二巌阿一、雲霞冠二秋嶺一。
（梁江淹「雑体詩三十首」〈謝僕射遊覧混〉『文選』巻二十一）

など、詩賦の霞と花を対句にした表現を家持は学んだとも推測される。また上代の例としては、

宇宙荒茫、烟霞蕩而満レ目。園池照灼、桃李笑而成レ蹤。
（藤原麻呂「五言、暮春於二弟園池一置酒一首」詩序『懐風藻』）

と用いた対句も留意されよう。しかも、「かすみ」と「花」を対句で取りあわせた表現は、当面歌の直後に「乎布の浦に　霞たなびき　垂姫に　藤波咲きて」（「六日、遊二覧布勢水海一作歌一首」巻十九・四一八七）ともみえ、家持の意に適うものであったと察せられる。かくみると、二上山を詠んだ「八つ峰には　霞たなびき　谷辺には　椿花咲き」は、池主の「峰高み谷を深みと」を念頭に置き、詩賦の対句表現を学んで整えられた表現だと推定されるであろう。

また、この「八つ峰」「谷辺」の対句は、つづく「うら悲し春し過ぐれば」の修飾句となっている。「うら悲し」は、家持の歌作では「春まけてもの悲しきに」（「見二翻翔鴨一作歌一首」巻十九・四一四一）とすでに類似の表現がみえ、さらには、

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも
（「廿三日、依レ興作歌」巻十九・四二九〇）

のごとく、いずれも独詠歌のなかに用いられている。しかしながら、当面歌が贈歌として詠まれている点に着目するならば、中臣宅守と狭野弟上娘子の贈答歌群（巻十五・三七二三～三七八五）にみえる短歌の表現が参考となる。

春の日のうら悲しきに後れ居て君に恋ひつつうつしけめやも
（三七五二　狭野弟上娘子）

家持・弟上娘子ともに春の日が「うら悲し」く感じられるという詠作の基盤は同じくすると考えられるものの、娘子にとってこのような心情になるのは、「後れ居て君に恋ひつつ」ある状況とも無縁ではあるまい。「うら悲し」い春の日を、ともにすごすべき相手がそばにはおらず、ひとりですごさねばならない心情までが「うら悲し」には反映していると思われる。ならば、家

持と池主も隣国にありながら容易にあうことがかなわないという立場にあることは注意されてよい。かつてのようにともにすごし得ない現実に対する心情が、叙景の修飾句を受ける「うら悲し春し過ぐれば」には示唆されているのであろう。しかも長歌前半部の冒頭と対蹠的に「ひとりのみ聞けばさぶしも」と後半部の表現で、この心情をより明確にしていると推知される。

さらに「見和ぎし山」の春景色から「ほととぎすいやしき鳴きぬ」へと展開する叙述には、黙過し得ない点が存する。長歌では、季節の推移がほととぎすを詠む契機となり得ているかの様相を呈するのだが、家持は、それのみで後半部への叙述を整えたのではないと思われる。家持は天平十九年三月に「二上山賦」（巻十七・三九八五～三九八七）をものし、

玉くしげ二上山に鳴く鳥の声の恋しき時は来にけり
（三九八七）

と詠む反歌第二首の「鳴く鳥」は、前後の歌作からほととぎすと解されている。[3] また、天平勝宝三（七五一）年の、

二上の峰の上の茂に隠りにしそのほととぎす待てど来鳴かず
（「詠二霍公鳥一歌一首」巻十九・四二三九）

などでも、二上山はほととぎすと密接に関わる場所として詠まれている。つまり、ふたりの交流を回顧する前半部に二上山が詠まれた所以は、ふたりにとっての「見和ぎし山」であったばかりでなく、ほととぎすの鳴く山としての認識が家持にあったからなのではあるまいか。

「感旧之意」を中心に叙述する前半部から、ほととぎすを詠むための布石ともいうべき存在が「見和ぎし山」なのであろう。「見和ぎし山」は、池主との関わりから捉えた措辞であって、「二上山」と直截的に詠んでいないところに、家持の意図が汲み取れよう。それだけにいっそうの効果をもって、「見和ぎし山」は、題詞に記されたふたつの要素と緊密な連関を有する表現と位置付けられねばならない。

三

後半部の冒頭「ひとりのみ聞けばさぶしも」は、長歌を「我が背子と手携はりて」のごとくうたい起こすことと鮮やかな対比をなす。「ひとり」とは、ふたりが越中と越前とに離れている現在の状況をふまえており、同様な内容は池主がすでに「越前国掾大伴宿禰池主来贈歌三首」（巻十八・四〇七三～四〇七五）の第二首で、

桜花今ぞ盛りと人は言へど我はさぶしも君としあらねば
（「一、属レ物発レ思」四〇七四）

と詠んでいた。長歌の「ひとりのみ」は、池主歌の第五句「君としあらねば」に即応し、しかも、ふたりで桜花・ほととぎすを賞美できない心情を、いずれも「さぶし」と表現していることからも、「我はさぶしも君としあらねば」が、家持には強く意識されていたと察せられる。

この池主からの「来贈歌三首」をふまえたと思われる表現は、つづく「君と我れと　隔てて恋ふる　礪波山　飛び越え行きて」にも指摘できる。山がふたりを隔てていると詠むのは、「来贈歌三首」の第一首、

月見れば同じ国なり山こそば君があたりを隔てたりけれ

（「一、古人云」四〇七三）

であり、ここでの山は、国境の礪波山を指すとみるべきであろう。かたや家持は、

あしひきの山はなくもが月見れば同じき里を心隔てつ

（「一、答二古人云一」四〇七六）

と、池主の心がふたりを隔てていると和していた。ところが、ここでは贈答の立場が逆転しているがために、家持は贈歌を寄せた池主の立場から、その表現を受けて長歌を詠んでいることになる。長歌後半部でこのように池主の「来贈歌三首」との交渉が窺えるのは、三首の短歌に添えられていた書簡をもあわせて、池主が家持と離れた現実を嘆き、ともに越中ですごした日々を回顧した内容であったからなのであろう。池主にしてみれば、一年ほど前のみずからの歌作を長歌後半部の叙述がふまえていることは、容易に理解し得たであろうし、また、その意図するところも諒解していたと窺知される。しかしながら、あうことのかなわない状況を家持は嘆くのみならず、ほととぎすにふたりが隔てられている礪波山を「飛び越え行」くように詠む。さらにそのほととぎすを「あやめぐさ玉貫くまで」鳴かしめ、池主を安眠させないよう命じている。このように池主のもとで鳴くであろうほととぎすを、家持はつぎのような対句によって表現した。

〔明け立たば松のさ枝に
夕さらば月に向かひて

朝と夕を対にすることで、ほととぎすは昼夜を措かず鳴きつづけるものと詠み、「鳴きとよめ　安寐寝しめず　君を悩ませ」の結びとの関連をはかっていると思われる。ほととぎすを松と取りあわせた「明け立たば松のさ松に」には、先立つ例として、「明けくれば　柘のさ枝に　夕さらば　小松が末に」（巻十・一九三七「詠レ鳥」）がある。また、家持の詠作では、帰京後の例ではあるが、

ほととぎす懸けつつ君が松蔭に紐解き放くる月近づきぬ

（天平勝宝八歳、巻二十・四四六四）

のごときもある。家持の歌では「まつ」を懸詞で用い、「懸けつつ君が待つ」が「月近づきぬ」へとつづくことからして、ほととぎすとの取りあわせに重きがあるとはいえない。さらに、家持がほととぎすを詠むばあい、花との取りあわせが多く（「詠二霍公鳥幷藤花一一首幷短歌」巻十九・四一九二、四一九三）、当面歌のように松とあわせたことは、「意識しての模倣といふことになる」（土屋文明『萬葉集私注』）との見解を俟つまでもなく、巻十の長歌が家持の脳裡にあったとせねばなるまい。とはいうものの、対句の内容に着目すれば、「柘」「松」と植物同士があわされた巻十の例に対し、当面歌では天象物の「月」と「松」が対をなすという相違が存する。しからば、先立つ対句表現から「月」へと組み替えた点に、より注意を払うべきではあるまいか。

家持が「柘」「松」の対句から組み替えた「月に向かひて」は、

ぬばたまの月に向かひてほととぎす鳴く音遥けし里遠みかも

（「四月十六日、夜裏遥聞二霍公鳥喧一述レ懐歌一首」巻十七・三九八八）

と用いられた例が集中では最もはやい。ついで、

……あかねさす　昼はしめらに　あしひきの　八つ峰飛び
越え　ぬばたまの　夜はすがらに　暁の　月に向かひて……
（「詠二霍公鳥并時花一歌一首」四一六六）

とみえ、当面の「夕さらば月に向かひて」に至る。いずれもが家持のほととぎす詠であり、「柘」「松」から「松」「月」への組み替えは、彼のほととぎす詠と緊密な関係のうえでおこなわれた結果と察せられる。また、この「月に向かひて」は詩の表現と相渉る面のあることを、芳賀紀雄氏が指摘[4]しておられる。ほととぎすに用いた例は見えないようだが、鳥虫に用いた「向レ月」を、ほととぎすに及ぼしたものとされる。詩ではないものの、

未レ有下鶯臨二綺月一、筵開二許郭之談一、花聚二繁星一、門枉中荀陳之馭。上　（初唐盧照鄰「楊明府過訪詩序」『幽憂子集』巻八）

と類似の表現がみえ、「月に向かひて」は詩文との関わりがあることを窺わせる。してみると、対句をなす「明け立たば松のさ枝に」についても、同様な観点から、その表現の形成を捉え得るのではあるまいか。

まず鳥と松の取りあわせとしては、つぎの例などが参考となる。

朝吐二軽烟薄霧一、夜宿二迷鳥羈雌一。
（梁沈約「高松賦」『芸文類聚』巻八十八、木部上・松）

春煙生二古石一、時鳥戯二幽松一。
（初唐張説「和三張監遊二終南一」『張説之集』巻七）

また、松と月を対句であわせた例としては、

上月斜臨、寒松遙直。
（梁簡文帝「阻帰賦」『芸文類聚』巻二十七、人部十一・行旅）

一声清磬海辺月、十里香風澗底松。
（初唐魏徴「宿二沃洲山寺一」）[5]

のごとき詩賦の表現が留意される。ならば、「明け立たば　松のさ枝に　夕さらば　月に向かひて」の対句は、鳥と松あるいは月との取りあわせ、さらには松と月との対句をも詩賦の表現から学びつつ、あらたに整えられたものと推定し得るであろう。これはひとえに、家持が先行する対句表現を、詩文の表現と関わる「月に向かひて」に組み替えたことにあると判断される。

ほととぎすを詠む対句が、詩文との交渉によって造形されたと認め得る要因となった「月に向かひて」は、以後の歌作に用いられなかったようである。だが、月との取りあわせは、当面歌とほぼ時を同じくする「不レ飽下感二霍公鳥一之情上述レ懐作歌一首」の反歌第一首に「さ夜更けて暁月に影見えて鳴くほととぎす聞けばなつかし」（四一八一）とみえ、さらに「詠二霍公鳥并藤花一一首」でも「夕月夜　かそけき野辺に　はろはろに　鳴くほととぎす」（四一九二）のごとく、天平勝宝二年のほととぎす詠のなかで詠み継がれてゆく。これらの歌作で注意すべきは、家持が月を詠む際、時の限定を加えて表現に変化を持たせていることであろう。このように、時の限定を施した表現は、まず「暁の月に向かひて」（四一六六）と詠まれ、「暁月に影見えて」（四一八一）へと継承される。前者は時に対する意識よりも、「月に向かひて」に重きが置かれているといえる。一方後者では、「暁月」のごとく、時の表現と月をより緊密化させたものと看て取れる。ところが、当面歌の「夕さらば月に向かひて」は、「暁」に執着するこれらの作品をつなぐ位置にありながら、月を詠む表現に

同様な傾向があるとは認められない。家持は時の限定を加えた表現を用いてゆく過程において、この長歌ではあえて異なる姿勢を示したことになる。むろん、「月に向かひて」は「明け立たば」「夕さらば」の対句で用いられていることが考慮されなければならないであろう。そうした対句の「夕さらば」によって時は表現されているのだが、「暁月」などに較べて、用いた家持の意識は異なるとせねばならない。つまり、家持は時への鋭敏な感覚をあらわすこと以上に、ここでは「月に向かひて」という表現に意を注いでいたと思われる。ならば、「夕さらば月に向かひて」は、同じく時の限定を伴わない「ぬばたまの月に向かひて」（三九八八）を直截的に継承した表現である蓋然性が高いと推察される。

「ぬばたまの月に向かひて」の歌については、すでに芳賀紀雄氏が確認[6]されているように、越中でのほととぎすの初声を聞いての詠作と推定されるとともに、家持のほととぎす詠のなかで、月との取りあわせを確立した作品であると位置付けられる。また、この短歌では、題詞の漢語と歌の表現との交錯が特色としてあげられるが、当面歌との関連について考えるばあい留意すべきは、「四月十六日」の日付が題詞に記されたことにある。

暦法に対して殊に敏感な意識を持っていた家持[7]が節月などを知るすべは、「雑令」（6造暦条）の規定により各国に頒布されていた具注暦にあったと推定される。この具注暦は、いくつかの断簡が現存するものの、天平十九年のそれは残らない。ただし、現存する具注暦のなかに、

十六日、辛亥金成　望。

（天平二十一〈天平感宝元・天平勝宝元〉年具注暦二月条、『大日本古文書』三―三四七～三五三頁）

と、十六日の条に、その日が満月にあたる「望」の注記を有する例がある。[8]むろん、注記が十五日にあるもの、あるいはいずれにも注記を欠く箇所も存する。かくみると、天平十九年の具注暦が残らない憾みがあるのだが、他の具注暦の十六日条に「望」の注記が存するところから推して、家持は十六日の月を満月、あるいはそれに近いものと暦によって理解していた可能性が存する。従って、「夕さらば月に向かひて」では、殊更に時の限定を伴わない「月に向かひて」という表現を繰り返したのみならず、そこで詠まれた月が満月、あるいはそれに近い存在であると解し得る可能性のあることが重要なのではあるまいか。

これとあわせて、当面の長歌を贈られた池主が、先の「来贈歌三首」の第一首で月を詠んでいる状況は、注意されなければならないだろう。池主は「月見れば同じ国なり」（四〇七三）と、月がふたりをつなぐよすがであると詠んでいた。この「月」は、三首の短歌に附されていた書簡の「三月十五日」という日付からすれば、満月に近い月と考えることができる。ならば、池主は書簡の日付が「十五日」になることを承知のうえで、意識的に月を取り上げたといえよう。そうした池主の意図は、家持にとっても十分把握されていたと考えられる。しかも、「来贈歌三首」の表現を、長歌後半部の叙述が踏まえている点からも、「月見れば」の「月」と日付の「十五日」とは、家持に強く意識されていたと思われる。

要するに、当面歌の「夕さらば月に向かひて」は、家持のほ

ととぎす詠中の満月に近い月を詠んだであろう「ぬばたまの月に向かひて」を継承する表現であると同時に、池主転任後の「来贈歌三首」（第一首）に詠まれた月をも想起させる表現であったと推定される。ゆえに、「月に向かひて」には、時の限定を施し得なかったのであろう。なお、題詞に記された「四月三日」の日付からすると、上述のごとく捉えた月の表現と実際の月齢とは符合しないことになる。しかしながら、この点については、前後のほととぎす詠の詠作態度と同様に解すべきといえる。つまり、家持は実際にほととぎすの声を聞かずに鳴くほととぎすを詠んでいたのであり、月もこれに同じく、彼の想像によって表現されていたと考えられる。

一方、対をなす「明け立たば松のさ松に」には、「夕さらば月に向かひて」にみたような表現の連係を認め難い。これは、長歌の叙述からみて、松は越前の役宅に植えられていたと考えるほかない状況にあるためでもあろう。庭園の属目詠として松は、「常磐なる松のさ枝を我は結ばな」（巻二十・四五〇一　大伴家持）と詠まれ、庭園に植栽されていた植物として、広く愛好されたものの一つであったと判断できる。[9] ならば、平城京の邸とは異なる国司の役宅ではあるが、「兼詠二云遷任旧宅西北隅桜樹一」（巻十八・四〇七七題詞）と桜樹が植えられていたことなどを勘案して、「遷任旧宅」には松が植えられていた蓋然性が高い。これによって家持は、かつてともに聞いたであろう役宅の庭の松で鳴くほととぎすを思いつつ、池主のもとで鳴かしめるほととぎすを詠んだと思われる。

長歌は、「安寐寝しめず君を悩ませ」とほととぎすに命じて結びとする。この二句は、「我が背子を安寐な寝しめ」と反歌第二首で繰り返され、しかも「ゆめ心あれ」と強く念を押して結ぶ。また、反歌第一首では、後半部の冒頭「ひとりのみ聞けばさぶしも」を第一・二句に取り込み、その心情をまぎらすために第五句で「い行き鳴かにも」と自身の願望を詠んでいる。二首の反歌は、それぞれが長歌後半部の首尾を受け、前半部との対応は認められない。このような偏りが生じたのは、かつての交流を懐かしみ、池主と離れた現在の心情を詠んだのが後半部であったことにあるといえる。反歌では、そうした池主を思う家持の心持ちを繰り返し、強調したと解し得る。

如上のごとき長歌後半部から反歌二首への展開をみるに、家持の態度は、ほととぎすを池主のもとへ行かしめることで一貫する。これには、ふたりが隣国にありながら、令の規定（「関市令」1欲度関条など）によって、あうことが思うにまかせない現状もふまえられていようが、家持にはつぎの短歌が意識されていたのではあるまいか。

過所なしに関飛び越ゆるほととぎす多我子爾毛やまず通はむ　（巻十五・三七五四　中臣宅守）

第四句は訓義未詳であるが、自由に関所を飛び越えてゆくほととぎすを、家持は賞美の対象以上に羨望すべき存在として捉えていたであろう。そうした思いは、ほととぎすに命ずる態度でもって、逆説的に表現されている。とはいえ家持の真意は、反歌第一首に表われているように、池主を困惑させることにあるのではない。しかも、ほととぎすに命令して相手のもとに行かせると詠む姿勢は、

大神女郎贈二大伴家持一歌一首

ほととぎす鳴きしすなはち君が家に行けと追ひしは至りけむかも　（巻八・一五〇五　夏相聞）

に窺える遊戯性に通じるといえ、それは池主にとっても、十分理解し得たと推察される。

家持は、長歌後半部と反歌二首で「感旧之意」を述べるのみならず、前年の十一月から十二月にかけての針袋をめぐる贈答（巻十八・四一二八～四一三三）でみせた遊戯性をも窺わせる表現を用いている。このように、「不レ勝二感旧之意一述レ懐」と題詞に記した池主への贈歌は、これまでのふたりの贈答・唱和をひとつひとつ思い起こすかのごとく叙述された作品であると把握される。

四

題詞に「不レ勝二感旧之意一述レ懐」と記しとどめた家持は、その心情を表現するために、ふたりの贈答・唱和からいくつかの表現を選び取り、長歌を構成した。すなわち、前半部には池主が越中掾であった折の贈答・唱和を、また後半部では池主転任後の「来贈歌三首」をふまえるという、細かな配慮が窺える。ただし前半部に関していえば、家持がふまえた池主の歌作は、いずれも四月以降という顕著な偏りをみせる。長歌では「うら悲し春し過ぐれば」と前半部末尾で述べ、季節を春に設定していたにもかかわらず、暮春三月を中心にしたふたりの贈答に依拠した形跡は認められない。これには題詞に「四月」と明記した点が考慮されたとも考えられようが、前半部の叙述内容からして、天平十九年二月二十九日から三月五日にかけての贈答の最後に家持が池主に宛てた「七言一首」「短歌二首」（巻十七・三九七六、三九七七）の左注に「大伴宿禰家持臥レ病作之」と記されていることと密接に関わるのであろう。この贈答では、上巳の宴を念頭に置いていたと考えられ、二月二十九日の「守大伴宿禰家持贈二大伴宿禰池主一悲歌二首」（巻十七・三九六五、三九六六）は、宴への参加を断念する旨を伝えた作品といえる。[10] また「三月三日」の日付を持つ家持の贈歌では、

……隠り居て　思ひ嘆かひ　慰むる　心はなしに　春花の
咲ける盛りに　思ふどち　手折りかざさず　春の野の　茂み飛び潜く　うぐひすの　声だに聞かず……

（「更贈歌一首」三九六九）

と、池主とともに遊覧できない嘆きを詠んでいることからも、「我が背子と手携はりて」とうたい起こした歌作に、これらの贈答で用いた表現を家持は意図的に持ち込まなかったと推察される。

用いる表現と構成を家持は熟思していたといえる当面の長歌に対して、武田祐吉は「前半の追憶の部は、よくできているが、春の叙述がくわしくてホトトギスが軽くなっている」（『萬葉集全註釈』）と、ほととぎすを詠み込むまでの春の叙述が長いために、題詞に明示された主題である「霍公鳥」が十分に表現されていないと解する。長歌の構成からすれば、かかる言説は一面において首肯されねばならないであろう。しかしながら、「不レ勝二感旧之意一述レ懐」と題詞に明記する当面の贈歌は、いみじくも窪田空穂が「春は餘分の如くであるが、池主をして以前を思ひ出

させることを主にすれば、云はざるを得ないもので、又云ふが適当なものである」（『萬葉集評釈』）と評する立場から捉えるべきなのであろう。

当面の長歌と同様な構成を有する作品には、この贈歌からほどなく詠まれた「詠二霍公鳥并藤花一一首」（巻十九・四一九二、四一九三）がある。ほととぎすの鳴く二上山を導き出すまでの序は、桃柳の譬喩でうたい起こされ、女性の優婉な描写へと展開する。そのような長歌の叙述には、当時越中に下向していたであろう妻の坂上大嬢[11]、あるいは都の「留女之女郎」[12]が関与していたとみられる。一見餘分と思われる長歌の叙述も、家持にしてみれば確たる意味を持つのである。当面歌の春の情景は、その由来が題詞に明示されており、家持がこれを重視していることからも、決して餘分ではあり得ない。

また池主転任後のふたりの贈答をみるに、集中には当面歌に先立つ贈答が少なくとも二度あったことが確認できる。そのいずれもが、池主からの贈歌に対して、家持が答歌を詠んでいた。ところが、このほととぎす詠では、家持がまず歌を贈ったと覚しく、その積極的な姿勢は「不レ勝二感旧之意一述レ懐」と題詞に記したことと相俟って、家持がこの歌作に込めた、かつての贈答・唱和を懐かしむ心情を池主に伝えるには十分であったといえる。かたや、「安寐寝しめず君を悩ませ」「我が背子を安寐な寝しめ」と詠んだ態度は、「濃やかな友情を戯談まじりに披瀝したもの」（窪田空穂『萬葉集評釈』）であり、そうした素地もすでに整えられていたと推察される。

ただし憾むべきは、贈歌に対する池主の答歌が残らないことである。家持はこの直後にも「贈二水烏越前判官大伴宿禰池主一歌一首并短歌」（四一八九～四一九一）を贈るものの、池主の答歌は集中に残されていない。さらには、神堀忍氏[13]が推定されているように、当面のほととぎす詠には、以前の贈答と同様に書簡が添えられていたと考えられる。その全貌を知るすべはないのだが、一端は題詞の「不レ勝二感旧之意一」に窺い知ることができるのではあるまいか。

題詞に「霍公鳥歌」と主題を明示しつつも、全篇を覆っていたのは、かつてのふたりの交流を回顧し、現状を嘆息するという内容であった。かくのごとき家持の態度は、まさに「不レ勝二感旧之意一」と記したことに集約されてゆくといえる。

（平成六年三月二十九日）

注

1　後者の「来贈戯歌四首」「更来贈歌二首」は、いずれも池主の歌作。この時の贈答の次第については、拙稿「大伴家持と池主の贈答――池主の戯歌を中心に――」（『萬葉』第百四十八号）参照。

2　『新潮日本古典集成　萬葉集五』当該歌頭注。

3　橋本達雄氏『萬葉集全注　巻第十七』参照。

4　「大伴家持――ほととぎすの詠をめぐって――」（『論集　萬葉集』和歌文学の世界11）

5　魏徴の詩は『全唐詩』未収。陳尚君輯校『全唐詩補編』（『全唐詩続拾』）による。

6　注4、ならびに「遙かなるほととぎすの声――家持の越中守時代の詠作をめぐって――」（『ことばとことのは』第十集）参照。

7　関守次男氏「家持の季節観と暦法意識」（『山口大学文学会誌』第十五

巻一号)、奥村和美氏「家持歌の日付について」(『国語国文』第六十巻十一号)参照。

8　他に、天平十八年二月、天平勝宝八歳一月・三月の十六日条にも「望」の注記がある。

9　田中哲雄氏「平城京左京三条二坊六坪の庭園遺跡」(『佛教藝術』第百九号)参照。

10　芳賀紀雄氏「家持の桃李の歌」(『小島憲之博士古稀記念論文集古典学藻』)参照。

11　大越寛文氏「坂上大嬢の越中下向」(『萬葉』第七十五号)では、天平勝宝元年十月末から十一月初めという推定がある。また、長歌の叙述と大嬢との関わりについては、注4芳賀紀雄氏論文参照。

12　伊藤博氏『萬葉集の歌群と配列』下(第九章第四節「天平ひとつの文化」)参照。

13　「家持と池主」(『萬葉集を学ぶ』第八集)

付記　本稿は、平成五年度筑波大学大学院文芸・言語研究科に提出の修士論文に、加筆訂正を施したものである。稿を成すに際して終始、芳賀紀雄先生のご指導を賜りました。末尾ながら、ここに記して、深く謝意を表します。

(筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本文学)